

單ナ聲明書ヲ出シタ、此ノ聲明書ハ單ニ蘭印經濟政策ノ綱領ヲ示シ、之ヲ辯護シタニ過キヌモノデ、我方ノ「ステートメント」ニ直接觸レテハ居ラス。

第三章 我方四大原則ノ提示

昭和九年六月四日蘭印總督ハ「バイテンゾルフ」ノ官邸デ日本代表部員招待ノ午餐會ヲ催シタ、其時ノ會見錄ト六日ノ會見錄ハ左ノ通りデ、「ステートメント」公表ニ次ク筆者ノ工作ヲ示スモノデアル。

六月四日「バイテンゾルフ」總督官邸午餐會「デ」。

ヨング「總督及「ランネフト」首席代表トノ會談

一、昭和九年六月四日蘭印總督我一行ノ爲メニ午餐會ヲ催シタル處、其直前當地ノ慣例ニ從ヒテ本使同總督ニ對シ儀禮的訪問ヲ爲ス。

此會見ニ於テ最初雜談ヲ交ヘタル後、本使ヨリ意見交換ノ爲メ今次會商開始前面談シ度キ旨口ヲ切リタル處、總督ハ言下ニ「ランネフト」氏ハ勅命ニ依リ委員長ニ任セラレ居ルニ付テハ萬事ハ同氏ト話合ハレ度シト答フ。本使ハ之ニ對シ右勅命ニ依ル任務ハ商事的會商ニ關スル儀ト思考セラル、處、目下ノ如キ勞圍氣ノ下ニ直ニ技術的會談ニ入ルモ其成功甚タ疑ハシト思惟シタレハコソ、曩ニ武富公使ヲ通シ貴官ト屢々會談シ度キ希望ヲ蘭國政府ニ申入レタル次第ニシテ、同政府ニ於テモ亦之ニ異存ナク、同政府ヨリ此旨貴官ニ知照スヘシトノ回答アリタル由ナルカ、此報ヲ接受セラレサルヤト聞キタルニ、總督ハ斯カル通報ニ接シ居ラスト答フルト同時ニ、最近接受セル近衛公ノ署名アル東京南洋協會ヨリノ書翰ヲ示シ、特ニ其中

ニ在ル蘭印側今次ノ措置ハ日本商人及商品ヲ「エキスベル」ストノ文句ヲ指摘シ、新聞記者ノ辭令ナラハ兎モ角、近衛公爵ノ如キ名士カ總督宛書翰中ニ斯カル辭句ヲ使用スルハ國際慣例上稀有ノコトナリ、ト昂奮氣味ニ語レルニ付、本使ハワザト之ヲ閱讀セス即答シテ、其字句ノ不穩當ナリヤ否ヤハ暫ク措キ、同公ノ有スル感シハ日本國民ノ均シク懷抱スル所ナリ、是レ本使カ技術的會商ニ先タチ何等カノ手段ニテ此空氣ヲ鎮靜セシメ、尙ホ出來得ヘクハ之ヲ好轉セシムル爲メニ、貴官ト會談シ意見交換ヲ行ハントスル所以ナリ、其席ニ「ランネフト」氏參加ヲ貴方ニテ希望セラル、ニ於テハ敢テ異存ナシ、明日ハ東郷元帥ノ爲メニ國葬儀行ハルルニ付、何レニシテモ右會談ハ明日以後ノコトナル故、假令貴方ニ於テ和蘭本國政府ト照復セラル、必要アリトスルモ充分ノ時間アルヘシト述ヘタル處、總督ハ幾分諒解セル様子ヲ示シタリ、然シ此ノ上話ヲ繰述スモ先方ニ於テ即答シ難キ様見受ケラレタルヲ以テ、篤ト勘考アリテ然ルヘシト念ヲ押シテ打切り、話頭ヲ轉シ雜談ニ入レリ。

二、食卓ニ於テ食事ノ初メニ總督ヨリ我天皇陛下ノ御健康ヲ祝シテ杯ヲ舉ケ、本使又和蘭女王陛下ノ御健康ヲ祝シ之ニ應フ。

更ニ「テーブル、スビーチ」トシテ總督ハ先ツ東郷元帥ノ薨去ニ對スル弔辭ヲ述ヘ、此ノ際宴會ハ御遠慮スヘキカトモ考ヘタレトモ、會商ハ禮儀ニアラサルヲ以テ豫定通り御招キシタル次第ナリトテ、直ニ會商問題ニ入り次ノ如ク陳述セリ。

今回ノ會商カ困難ナル事業ナルコトハ何人モ之ヲ充分認メサルヘカラスト雖、日蘭間ニハ多年ニ亘ル友好

關係アリ、之ヲ基調トシテ事ニ當ルニ於テハ成功ヲ收ムルコト敢テ困難ナラサルヘシ。最近數ヶ月日本内地ノ新聞ノ論調カ甚シク非友誼的ナリシハ遺憾ナリ、和蘭ハ決シテ日本人及日本商品ヲ排斥スル意思ナシ蘭國政府ノ執リタル措置ハ或特定ノ一國ヲ目標トセルモノニアラス。自國ノ經濟組織ヲ維持スル爲メニ取リタルモノニシテ、外部的原因ヨリモ、寧ロ内部的原因ニヨルモノナリ、サレハ蘭印側ニ於テ日本品ヲ買フ爲メニハ、日本側ニ於テモ蘭印カ日本品ヲ買ヒ得ル様ニシテ貰ハサルヘカラス。之ヲ要スルニ日蘭兩國ハ其友好關係ニ立脚シテ相互協力ノ實ヲ舉クル様努ムルコト希望ニ堪ヘス。

本使ハ本席ニテハ純儀禮辭ノ交換ニ過キスト期待シ居タルカ、右ノ挨拶アリタルニ付左ノ如ク應フ、即チ東郷元帥ノ薨去ニ對スル總督ノ同情ニ謝意ヲ表シタル後、本席ニテハ純儀禮的言辭ノ交換ニ過キスト期待シ居タルカ、總督ヨリ會商ニ關スル御話アリタルニ付一言御答スヘシト前置シ、凡ソ會議ノ成功ヲ期セハ双方感情ノ融和ヲ最モ肝要トス、技術的問題ハ其ノ上ニ非サレハ到底纏マルモノニアラス、故ニ吾人ハ先ツ會議ヲ成功ニ導クカ如キ友好的雰囲気ヲ作ルコトニ努力セサルヘカラス、ト述ヘタリ。

三、食後「ランネフト」氏ヨリ本夕六時半頃本使ト會同シ會商ノ諸手續等ニ關シ打合セ度キ旨申出テタリ、本使ハ之ニ對シ食前總督ニ話セル所ヲ更ニ敷衍説明セル處、「ラ」氏ハ多少意外ノ面持ニテ、自分ハ今次會商ノ全權ヲ引受ケタルモノナリト述ヘタルニ付、本使ハ今茲ニ權限問題ヲ論シ居ルニ非ス、唯目下ノ空氣ニテハ會商ノ成功ハ殆ト期シ難キカ如ク思考セラル、ヲ以テ、如何ニカシテ之ヲ改善シ度シト考フル旨ヲ述ヘタル處、「ラ」氏ハ、自分側ノ空氣モ同様緊張シ居リ、言ヒタキ事多々アリ。貴方ニ於テハ果シテ如

何ナル案ヲ用意セラレタルヤ承リ度シト問ヒタリ、依テ本使ハ是レコソ自分カ會商開始ニ先タチ一般問題ニ付話合フ必要アリト認メシ所以ニシテ、日本ニ於テハ今次會商ノ性質ヲ政治的ニ考ヘ居レリト述ヘタリ然ルニ「ラ」ノ意中ニハ斯クノ如キ考ナカリシモノ、如ク一寸怪訝ノ表情ヲナセシカ直ニ悟リシモノ、如ク、「ラ」ハ總督ハ右ニ對シ如何ナル返答ヲ爲セシヤト聞キタルニ付前記ノ大要ヲ話シ、必要ナラハ和蘭本國政府ノ承認ヲ求ムルコト可然旨附言シタル處、「ラ」ハ一般問題トハ上陸ニ際シ配布セラレタル「ステートメント」ニ關聯スル次第ナリヤ、自分モ右ニ應フル爲メ「ステートメント」ヲ發表スル積リナリト言ヘルヲ以テ、本使ハ當方ノ「ステートメント」ハ之ヲ論議ノ端緒ト爲サンカ爲メニアラス、貴方ニ於テ如何ナルモノヲ書カル、ヤ知ラサルモ、當方トシテハ前記「ステートメント」ハ、之ヲ純然タル「ステートメント」トシテ取扱フ積リナリト輕ク答ヘ置ケリ。

四、辭去ノ際總督ハ握手ト同時ニ「ア、ビヤント」ト笑ヒ乍ラ述ヘタルガ、「ラ」ハ本使ヲ願ミ均シク微笑セリ、此表情ニ依リ本使ハ兩人同席會談承認ノ總督ノ意向ヲ表示スルモノ、如キ印象ヲ受ケタリ。

六月六日總督官邸ニ於ケル總督及「ラ」首席トノ會談

六月五日朝總督府ヨリ翌六日午前十一時面會シ度キ旨電話アリタルニ付、同刻出向タル處、「ランネフト」氏既ニ來着、先ツ本使ヨリ總督ニ對シ舊著「第十六七世紀ニ於ケル日歐交通史」ヲ寄贈シタル後直ニ會談ニ入レリ、其要領左ノ如シ。

本使ヨリ左記ノ陳述ヲ爲ス。

一昨日申シタル通り日本ノ輿論ハ最近六ヶ月來閣下ノ想像以上ニ激昂シ居リ、右ハ日本カ鎖國時代ニ於テスラ和蘭ニ對シ寛大ニ通商ヲ許可シ、且ツ蘭印ハ三世紀以上ニ亘リ日本ニ對シ輸出超過ヲ示シ居ルヲ以テ假令何等カノ事情ニ依リ兩國間ノ貿易關係カ日本ニ有利トナルコトアリタル場合ニモ、和蘭ハ從來日本カ有セルト同様ノ心情ヲ以テ事ニ處スヘキモノト確信シ居タルカ爲メニ他ナラス。此ノ如キ見解ハ日本人ノ道義觀念ニ基クモノニシテ和蘭人ノ觀念ト無關係ナルヤハ知ラサルモ、然シ現在日本ニ此種ノ感情存在シ此事情ハ無視スルヲ得ス。又之ハ單ナル巧言又ハ議論ヲ以テシテハ到底解消スルコトヲ得ス。從テ本使カ今回ノ使命ヲ受諾スルニ當リ、先ツ第一ニ達成セサル可ラサル任務ハ、閣下ノ好意的協力ヲ以テ何トカシテ此國民的激昂ヲ緩和スルニアリト認メタリ。若シ從來兩國間ニ存在シタル友好的雰囲気ヲ再現スヘキ何等カノ方法ヲ發見セサル限り、會商ハ到底双方ノ希望スルカ如キ満足ナル結果ニ到達スルコト困難ナルヘシ故ニ本使ハ會商ノ開始ニ先チ篤ト閣下トノ意見交換ヲ提議シタル處、幸ヒ閣下ノ承諾ヲ得タルニヨリ、専門的討議ノ基礎トナルヘキ公正ナル一般原則ヲ起草セリ。閣下ニ於テモ之ニ對シ好意的研究ヲ遂ケラレシコトヲ希望ス。右提議ハ經濟的範圍ヲ出ツルモノニ非スシテ「デ・グラーフ」外相カ在蘭帝國公使ニ提言セラレタルカ如ク、一九一二年ノ日蘭通商條約ノ補足的協定トシ作成セルモノナリ。

終リニ日本ハ一九二二年二月和蘭政府ニ對シ嚴肅ナル保證ヲ與ヘタルニモ拘ハラズ、其後モ猶日本カ未タ曾テ有シタルコトナキ意圖ヲ今猶抱有スルカ如キ感想ノ貴國人間ニ存在セルコトヲ屢々耳ニシ、甚タ遺憾

ニ感シタリ、本使ハ兩國間ニ存在スル友好關係ヲ更ニ緊密ナラシメンカ爲、且ツ兩國民間ノ輯睦ヲ阻害スルカ如キ一切ノ誤解ヲ一掃センカ爲、閣下ヨリ本使ニ提出セラルヘキ一切ノ提案又ハ提言ニ對シテハ喜ンテ同様に好意ヲ以テ研究スルノ用意アリ。

次テ左ノ如キ聲明案ヲ兩氏ニ交付ス。

日蘭兩國間ニ長年間存在スル善隣友好ノ誼ヲ更ニ緊密ナラシメンカ爲ニハ、日本國ト蘭領印度トノ經濟的連繫ヲ愈密接ニスルニ在ルヲ惟ヒ、一九一二年締結ノ通商條約ヲ補足スル趣旨ヲ以テ、下名ハ各日蘭兩國政府ヲ代表シ、左記ノ聲明ヲ爲ス。

一、和蘭國カ蘭領印度ヲ自國生産品輸入ノ爲ニ保留シ、又其ノ地產業保護ノ爲ニ必要ノ措置ヲ採ルハ其ノ固有ノ權利ニ屬スト雖モ、之ヲ行使スルニ當リテハ、常ニ各般ノ事情ニ充分ノ考慮ヲ加ヘ、合理的且ツ公正ナル措置ヲ採ルヘキコトヲ聲明ス。

二、日本國ト蘭領印度トノ間ノ經濟關係ヲ益々進展セシムル爲ニハ、出來得ル限り雙方貿易ノ健全ナル發展、増加及調整ヲ圖リ、又當業者相互ノ利害ヲ調節シ、其ノ利益ヲ公平ニ保護スルノ必要ヲ認メ、之カ具體化及改善ニ付時々協議ヲ遂クヘキコトヲ茲ニ聲明ス。

三、日蘭兩國ハ直接タルト間接タルト問ハス、相互ノ商工業、航海及課税ニ關シ第三國ニ要求スル以上ノ實質的過重條件ヲ決シテ課セサルヘキコトヲ聲明ス。

四、日本國及蘭領印度ハ其經濟的連繫ヲ緊密ナラシムル爲メ、工業、航海、水產其他ニ關シ、企業自由ノ

見地ニ基キ、諸法令ノ許ス範圍内ニ於テ相互協力ノ實ヲ舉クルコトニ付、隔意ナキ協議ヲ遂クヘキコトヲ聲明ス。

總督ハ本聲明案ハ條約ノ性質ヲ帶ヒ純然タル外交的ノモノナレハ、自分トシテ唯今何トモ即答スルノ權限ヲ有セス。早速本國政府ニ電報シ其意見ヲ徵シタル上何分ノ御回答ニ及フヘシト述フ。本使ハ此聲明案ハ當方カ當然ト認ムル諸原則ヲ羅列セルニ過キササルモノナレハ、和蘭政府ニテ左シタル異存アリト思ハサルモ、若シ同國政府ニ於テ之カ修正追加乃至削除ヲ必要ト認メラル、ニ於テハ、當方ニ於テモ右ニ付十分ノ考慮ヲ加フヘシ。只今申述ヘタルカ如ク日本及日本人ニ關シ我々ノ少シモ考ヘ居ラサル事柄ニ付危懼ノ念和蘭側ニ存在スルカ如ク思ハル、節多々アルニ就テハ、若シ貴方ヲ安堵セシメ得ル何等カノ途ヲ當方ニ於テ講シテ貰ヒ度シトノ意向アルニ於テハ、之亦考慮スルニ吝カナラサルヘシ、而シテ只今ノ提案ハ純經濟的ノ原則ニ過キササルカ、之ニ關聯シテ有ユル諸問題ヲモ一括清算シ度キ趣旨ニテ、特ニ貴總督トノ會見ヲ希望セル次第ナリ。

「ランネフト」氏ハ傍ヨリ言ヲ挾ミ、此提案ハ貴見ノ通り純經濟問題ナレハ、是コソ日蘭會商ノ討議事項ニシテ、態々本國政府ヲ煩ハス迄モナク自分等ニ於テ研究シ得ヘク、今此案文ヲ瞥見シタル所ニテハ第三項及第四項ニ付テハ相當議論アリ得ヘシト述フ、總督ハ兩人ノ間ニ挾マリ甚タ當惑ノ體ニテ、然ラハ自分カ此案ヲ受取り之ヲ「ラ」ニ研究セシメタル上何分ノ回答ヲ本使ニ取次クコト、シテハ如何ト云ヒタルニ付、本使ハ今申述ヘタル通り當方ノ提案ニハ蘭國政府ノ考ヘ如何ニ依リテハ政治條項ヲモ附隨シ得ル可能

性アリ。本使トシテハ貴方カ如何ナル權限ヲ有セラル、ヤ勿論不明ナルモ、惟フニ純通商事項ニ限局セラレ居ルヘク、本使ノ有スル權限トハ大ナル開キアル様困思考セラル。例ヘハ若シ貴代表カ此提案ヲ取扱ハルルトシテ、只今例示セラレシ第四項ニ付之カ承諾ヲ困難ナリト申出テラル、場合、其理由ニ遡リ困難トスル内容ヲ消散セシムル爲メ、當方ヨリ若シ蘭印不可侵ノ約束ヲ爲サムコトヲ申出テタルトキ、貴代表ハ果シテ之ニ應對シ得ル充分ノ權限ヲ有セラル、ヤト質問セル處、「ラ」ハ勿論斯クノ如キ權限ナシト答フ。

本使ハ之レ即チ本使カ貴官ヲ加ヘ總督ト談合セント欲スル所以ナリト述ヘタル處、總督ハ日本側ニ於斯テクノ如キ廣汎ナル會商ヲ爲ス意思ヲ有セラレシニ於テハ、豫メ蘭國政府ニ「ヒント」ヲ與ヘ置カレシナラハ好都合ナリシナルヘシト云ヘル故、本使ハサレハコソ曩ニ在蘭公使ヨリ外務大臣ニ對シ本使屢々總督ト會見スルコトアルヘキ旨ヲ通告シ、外務大臣ニ於テモ之ヲ諾シ貴總督ニ通知スヘシト約サレタル次第ナリ從テ當方ニ於テハ、日本側ノ意ノアル處ハ既ニ充分貴總督モ諒解セラレ居ルコト、思考シ居タル次第ナリト述ヘタリ、總督ハ執レニセヨ日本ニ對シ疑懼スルト云フカ如キ念ハ毫モ無之、此點ハ充分御安心ヲ願度シト云ヒタルニ付、本使ハ果シテ然ラハ至極結構ノコトナルカ、御承知ノ通り嘗テ華府會議ニ於テ四國條約締結ノ際「フアン・カルスベーク」外相ヨリ、此條約以外ニ蘭葡兩國ヲ加ヘタル六國間ニ同様ノ條約ヲ締結シ度キ希望ノ申出アリタルモ、會議ノ容ル、トコロトナラサリシ爲メ、同外相ヨリ然ラハセメテ蘭印尊重ノ宣言ヲ得度シト申出テ、其結果一九二二年二月駐蘭日本公使ヲシテ希望通り宣言ヲ蘭國政府ニ對シ爲サシメタル次第ナリ。然ルニ當地方ニ軍籍ニ在ル本邦人來訪ノ都度乃至軍艦特務艦來訪ノ度毎ニ種々好

マシカラサル報導ノ傳ヘラルルハ、我國トシテ心外ナラサルヲ得スト卒直ニ披瀝セル處、總督及「ラ」ハ交互ニ斯クノ如キハ日本側ノ誤解ナル旨極力辯解シ今回ノ制限令ニ付テモ決シテ日本ノミヲ目標トセルモノニ非スト述フ。本使ハ立法者ノ意思ハ假令斯クノ如クナリトスルモ、之カ爲メニ迫害セラル、主體カ日本ナルニ於テハ、結果ニ於テ其間選フ所ナシ、聞ケハ兩三日前「ヘーグ」ニ於テ與ヘラレタル「インタビュ」ニ於テ、日本人ノ「ベネトレーション」ニ付「センセーションナル」言ヲ弄セシ人アリトコトナルカ(註、之ハ「ウエレンスタイン」ノ「インタビュ」ヲ指スモノナリ)何萬ト云フ支那人カ「ジャヴァ」ニ於テ何等注視ノ目標トナラス平穩ニ其業務ヲ繼續シツ、アルニ不拘、僅カ七千人ノ日本人ニ付脅威ヲ感スルト云フカ如キコトハ、我々トシテ到底了解シ難キ所ナルト同時ニ、斯クノ如キ考ヲ有セラル、人カ蘭國代表部員トシテ存在スル以上、先ツ其蒙ヲ啓ク必要ヲ我々トシテ痛切ニ感セサルヲ得サル次第ナリ

昨年日本ト和蘭トノ間ニ義務的仲裁條約締結セラレタルカ、此條約ハ實ニ本使カ海牙ニ駐劄シ居ル際、日蘭兩國ノ親交ヲ増進セシメ以テ日本ニ對スル和蘭ノ危懼ヲ消散セシメント思ヒ、日本政府ニ其締結ヲ建議セシニ端ヲ發スルモノニテ、之カ調印ニ付テモ本使カ壽府ニ於テ「ベラーツ」外相ノ希望ニ依リ特ニ日本ニ電報シ韓旋シタル次第ニシテ、其後事態ノ變化ニ依リ我樞密院側ニ於テモ之カ御批准ヲ奏請スルニ躊躇シ居ル様ノ儀ナリト述ヘタル處、總督ハヨク諒解セリト答フ。

次ニ「ラ」ハ日本ノ提案ハ之ヲ考慮スルトシテ、會商ハ之ト無關係ニ一日モ早く開クコト、シ度シト述フ本使ハ右ニ對シ制限令ニ依リ苦痛ヲ感スルハ獨リ日本ナリ、又遠ク當地ニ出張シ一日モ速ニ會商ノ妥結ヲ

希望スルハ日本代表部ナリ、急ク必要ノ少ナキ貴方ヨリ會商ノ急速開會ヲ要求セラル、ハ本使ノ些カ諒解ニ苦シム所ナリト述ヘシ處、「ラ」ハ或ハ然ラン去リナカラ自分側ニ於テモ既ニ陣容整ヒ居ルニ付、會商ノ一日モ速ニ開カレンコトヲ希望ス、只今ノ提案ハ提案トシテ、差當リ會商ヲ開クコトニ付異存アルヤ知リタシト問ヘルニ付、本使ハ此提案ハ日本側ヨリ觀レハ當然ノコトヲ約束スルニ過キス、從テ此原則ヲ基本トシ會商ヲ進メ度ク、若シ蘭國政府ニ於テ右原則スラモ受諾不可能ナルニ於テハ、細目ノ會商ニ入ルトモ無意義ナリト思ヘハコソ、此ノ提案ニ對スル何分ノ回答アル迄會商ヲ開キ度クナシト云フ譯ニテ、決シテ蘭印代表部ニ對シ他意アル次第ニハ非ザルヲ以テ、此點ハ全然誤解ナキ様願度シト云ヘルニ、總督ハ笑ヒ乍ラ餘リ「エーマブル」ニモ非サル様ナリト口ヲ挿ミタリ。「ラ」ハ猶ホ執拗ニ會商ノ會期ヲ定メンコトヲ要求セルニ付、本使ハ然ラハ互讓ノ精神ニ依リ明後八日朝十一時ニ開クコト、シテ差支ナキモ、右ハ純然タル開會式ニ止メ、實質的ノ會議ハ此提案ニ對スル和蘭政府ノ回答ヲ得之カ纏マル迄開カサルコトノ了解ニテ八日開會ノコトニ異存ナシト述ヘタルカ、前記總督ト「ラ」トノ關係ニ鑑ミ萬一ノ行違ヒアランコトヲ惧レ總督ニ對シ重ネテ和蘭政府ヨリ回答アリ次第通知アリ度キ旨ヲ申入レ引取りタリ。

筆者ノ苦衷

「バタヅキヤ」着以來筆者ノ執ツタ行動ニ關シテ更ニ説明ヲ加ヘルハ或ハ蛇足カト考ヘルガ、念ノ爲メニ一言スレバ、第一ニ蘭代表部側ノ待設ケテ居ル商談ヲ何ノ準備ナシニ應諾スレハ、彼ハ必ス制限令ノ緩和、

夫レモ既發制限令ハ論外ニ置キ、夫ノ五十六種制限令案ニ手心スル對價トシテ、爪哇糖ノ買付ヲ要求スルノハ明瞭テアルカラ、若シ此態樣デ會商ヲ始メタラ、如何ニ努力苦心シテモ結局日本ノ負ケニ終ハルハ言ヲ俟タス。仍テ對策ハ成ルヘク商談ニ入ラスコトデ、少クモ先方ガ制限令ノ非ヲ悟リ、日本ノ世界ノ地位ヲ充分ニ了解シ、殊ニ需要供給ノ大原則ハ不自然ナル人爲工作ノ到底能ク之ヲ左右シ能ハサルコト、此大原則ヲ無視スルハ結局蘭印ノ福祉ヲ破壞スルニ過キササルコト、日本ハ決シテ虛喝ニ屈スルモノニ非ザルコト、盲目的ニ利益ヲ壟斷セントスル蘭商ノ妄想的欲望ハ徒ラニ彼等自身墓穴ヲ掘ルニ均シキコトヲ自覺シ、過去商策ノ非ヲ悟リ、誠意ヲ以テ協議セントノ決心ガツク迄ハ、商議ヲ開クモ無意味否有害デアルカラ、我々ハ彼等ノ蒙ヲ啓ク爲メニ最善ノ努力ヲ盡シ、時機ノ到來ヲ待ツ外ハナイノデアル。第二ハ筆者ガ代表受諾ノ時カラ懷イテ居ル理想デ、之ハ如何ニカシテ蘭印ヨリ日本ニ對スル危惧ノ念ヲ一掃サセタイト云フニ歸着スル。總督ニ出シタ聲明案ハ外相等ノ内諾ヲ得タ案ニ新嘉坡滯在中諸員ト協議シテ多少ノ修正ヲ加ヘタモノデアルガ、蘭印不可侵ニ對スル問題ハ元來先方ヨリ要求スヘキ性質ノモノ故、當方カラ案ヲ出スノハ無論差控ヘタ。筆者ハ其後機會アル毎ニ總督初メ「ランネフト」代表其他ニ對シ元來制限令ハ消極策デアル、蘭印百年ノ計ヲ樹テルニハ積極政策ヲ基調トセネハナラス、蘭印外領ニ於ケル未知廣大ノ富源ヲ開發シ、積極的ニ輸出入ノ調節ヲ求メテコソ、玆ニ初メテ將來ノ光明ヲ期待シ得ルノデ、我々ガ共同企業勸奨ノ提案ヲシタノモ全ク之カ爲メデアル、故ニ若シ此方針ニ共鳴シナガラ何等危惧ノ存スルモアラバ、之ガ艾除ニ協力スルヲ吝マヌコトヲ何回トナク繰返シ告ケタ。